

社会正義のためのキャリア支援
—困窮学生支援の取組みを通じた学生の成長—

津富 宏

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第21巻第2号（2023年3月）抜刷

【研究ノート】

社会正義のためのキャリア支援 — 困窮学生支援の取組みを通じた学生の成長 —

津 富 宏

本稿では、新自由主義的な価値観に覆われている今、大学生が、社会に対して「責任」を担う主体的な存在として育っていくためのキャリア形成支援の取組みについて記述する。

問題意識：大学におけるキャリア形成支援の隘路

社会全体が新自由主義的な価値観に覆われ、自己責任論が横溢する今、大学におけるキャリア形成支援は、しばしば、「就職活動の支援」と同一視されがちである。しかしながら、新自由主義的な社会を所与のものとして、社会「適応」を促進するようなキャリア支援には、①キャリアの主体的形成者としての自己認識を育てられない、②学生個々人が本来もっている感情や志向を抑圧しがちである、③社会に課題があったとしてもそれを変えていこうとする姿勢を身につけられないといった欠点がある。こうした欠点を乗り越えうるキャリア形成支援の一例として、本学で行われている、困窮学生支援の取組みを取り上げる。

責任を通じた自由

市場万能的な新自由主義は、一人一人が自己の利益の最大化を追求すれば、「見えない手」が働き、社会は「良くなる」という信念に基づいている。このような「信念」は、自らの行動のもたらす帰結に対する責任から、一人一人の個人を免責してしまう。例えば、企業行動において、(特段のペナルティがない限り) 外部不経済が許容されてきたのも、そのような免責の結果である。しかしながら、カール・ポランニー(2012(1927))は、「責任からの自由」(責任を取らない／問われない自由)ではなく、「責任を通しての自由(責任を引き受けることによる自由)」を提唱した。このことについて、カール・ポランニーの研究者である若森(2015)は、以下のように述べている。

市場社会は複雑な社会であり、人々の資産所有者、生産者、消費者としての選択的行為が意図せざる影響として失業や貧困や倒産といった社会における経済的な苦難（過酷な自由の制限）を生み出しているにもかかわらず、人びと自己の行為の因果関係を見通すことができないので、「自分は誰にも迷惑をかけていない」と考えることができるのである。市場経済は人びとに、自己の経済的行為の社会的影響に対する責任から自由であることを許容している、ということができる。より根本的には、複雑な社会においては、人びとは「意見や欲望」を表明することを通して他の人々の精神的・物質的生活を制約する権力と経済価値の創出に巻き込まれているにもかかわらず、そのような創出への加担の責任を問われることがないのである（若森, 2015, p238）。

市場社会は、その構成者の関係性を通じて機能しており、自らの行為が他者の禍福に影響することは必然である。にもかかわらず、「因果関係を見通すことができない」という合理化によって、人は、「責任からの自由」に逃げ込んでしまうのである。ポランニーの「責任を通しての自由」は「社会的自由」ともいわれる。

社会的自由の真の重要性は一人の人間の他者に対する現実的な関係に基づいている。この重要性は一方ではあらゆる人間関係は社会的な結果を伴わざるを得ないという理解と、もう一方では社会においては個人の行動に基づかない存在、権力、構造、法は存在し得ないという理解、この二重の理解を私たちに要求する。社会主義者にとって、自由に行為するとは、私たちが人と人との関係に責任を負っているという事実を背負っているということ意識して行為するということを意味する。人間関係の外には社会的現実には存在せず、私たちがこの責任を負わなければならない。よって、自由であるとは、ブルジョワジーの典型的イデオロギーのように、義務と責任を逃れることを意味することはもはやなく、義務と責任ゆえに自由なのであることを意味する。つまり、それは義務と責任を引き受けないことではなく、自ら引き受ける自由であり、自らを社会から解放する自由ではなく、社会的なつながりの基礎的な形態であり、他者との連帯が終わる地点ではなく、社会に対する逃れることができない責任を自ら担う地点なのである（Polanyi (1925) から Thomasberger (2003) が英訳して引用したものを筆者が翻訳）。

ここでは、責任からの自由＝自らを社会から解放する自由＝ブルジョワジーの自由と、責任を通しての自由＝他者と連帯することで責任を引きうける自由＝人間としての自由が対比される。社会的現実はこの「人間関係」の外には存在しない、つまり、関係を引き受けることを通じて、私たちは社会を変えられるのである。

社会正義のためのキャリア支援

ポランニーの影響を受けたホネット（2021）は次のように言う。なお、ホネットは、資本主義と市場社会を区別している。

要するに経済領域に関して言えば、わたしの研究は市場社会の期待に関わるのであって、資本主義の期待には関わらないのです。

さて、市場社会の規範的合意に関してですが、市場社会は市場における相互交換という方法によって、ニーズを友好的で強制なく完全に満足させることをすべての参加者に約束するものだと思っています。それだけでなく、あらゆる契約は、直接的であれ、間接的であれ、あらかじめどんな強制もなく、対等な者たち間でなされるものであるという基本的な考え方を市場社会は必要としています。その際、私自身がこれらの期待をどのように理解しているかということ、社会的自由が保障されねばならないということ、つまり、参加者が自らの経済活動を他者の目的の強制なき実現のための必要条件として理解することが可能であるはずだということです。・・・これらの期待が資本主義的な市場社会の中では十分に実現されることはないということをきわめて明快に示しました。（p.48）

つまり、ホネットにとって市場社会を規範に沿って機能させるのは資本主義ではない。

貧困とは何か

困窮学生支援にあたり、その背景にある貧困理論について確認しておこう。ここで参照するのは、志賀（2016）が『貧困理論の再検討』で行った議論である。端的に言えば、志賀によれば、貧困とは、財やサービスの不足ではなく、自由の不足である。

志賀は、彼の貧困理論を、先行する代表的な貧困理論であるタウンゼントの貧困理論（相対的貧困）に対する批判として展開する。志賀によれば、相対的剥奪を貧困状況と定義し、その社会における「通常」の暮らしを下回る暮らしを貧困と定義する、タウンゼントの貧困理論は、完全雇用が可能であることを前提とするベヴァリッジ体制に適合したものであり、現在の「新しい貧困」を説明できない。

「新しい貧困」とは、長期的失業、非典型雇用など、福祉国家体制の用意する社会保障制度では対応できない社会問題により生じた、困窮や生活上のリスク、言い換えると、社会的排除である。志賀によれば、従来は、完全雇用を前提とする社会において、家族などのコミュニティへの参加を通じた役割（メンバーシップ）遂行を果たせるよう、財・サービスを提供すれば良かったが、「新しい貧困」が生じている現在では、従来型の貧困ではなく、市民としての社会参加の権利（シティズンシップ）（とりわけ、労働の権利）を保障する方向へと、政策が転換している。言い換えると、現在の社会政策は、社会的排除を課題化し、社会的包摂＝社会参加の権利を保障すると

いう方向へと向かっている。

志賀の議論は、セン (Sen, 1992) の貧困の定義「貧困とは福祉水準が低いということではなく、経済的手段が不足しているためにケイパビリティがないことである」に拠っている。すなわち、貧困とはケイパビリティの欠如である。さらに、ケイパビリティは、「人びとがある財やサービスを使用して、ある状態になったり何かをすること」とされるファンクショニングの集合として定義される。

つまり、貧困とは、ある状態になったり何かをする自由 (=ファンクショニング) が欠如していることであり、財・サービスが欠けていることそのものではない。実際、センは、「所得水準で考えるならば、貧困の概念において重要なのは、それが最低限必要なケイパビリティをもたらすには足りないということであり、個人の特徴とは無関係な所得水準の低さそのものが問題なのではない」と述べている。

上記の引用においても明らかなように、ケイパビリティとは個人の能力を指すのではなく、「諸個人の能力、財、環境の組み合わせ」の結果として、その個人が「ある状態になったり何かをする自由」を指しており、裏返せば、ケイパビリティの保障とは、財・サービスの一律な保障ではなく、個々人の特徴を踏まえた保障ということになる。

ここで志賀が参照するのは、高田 (2013) の「非能力主義的平等主義」である。「非能力的平等主義とは、「能力のない個人に対しても専門家が支援しながら「自己決定」を可能にするもので、誰もが自立した市民として行動できるように積極的な介入をするという平等主義」である。このように、非能力主義的平等主義においても、単なる財・サービスの保障ではなく、自己決定の可能性という自由の保障が強調される。

それは、個々人の能力を等しいと仮定し、財・サービスに関して同一の給付を行えば平等な競争が行われうるという福祉国家体制はもはや終わり、個々人の能力が異なることを前提として、個々人に能力を付与する (エンパワメントする) 支援を行わなければならない「新しい貧困」の時代に私たちが直面化しているからである。

上記のような志賀の議論を、大学における困窮学生支援に当てはめると、単なる (とりわけ、一律の) 財やサービスの給付 (たとえば、食料給付や金銭給付) ではなく、「学生であるという状態であったり、学ぶことができるという」自由の保障こそが、困窮学生支援の目的となる。言い換えると、学業の権利の保障という、大学への包摂が目的である。現状では、本学においては、このような目的は共有されておらず、単発的な金銭支援にとどまっており、個々人の特徴に応じたエンパワメントを行う仕組みはビルトインされていない。本学における困窮学生支援を取り巻くのはこのような文脈である。

社会正義のキャリア支援

社会正義のためのキャリア支援

下村（2020）は『社会正義のキャリア支援』において、世界全体に拡大している「社会正義」をキーワードにしたキャリア支援論をコンパクトに紹介している。その背景には、志賀と同様、この社会の労働市場が激変し、一時的な失業であったものが、いまや長期失業や社会的排除に至っているという認識が示されている（p8）。

下村は、同書の冒頭で、IAEVG（国際キャリア教育学会）の社会正義コミュニケを紹介している。下村によれば、このコミュニケには以下のような記述が示されている。

社会的な不公平や分断が近年とみに増加しており、経済的・社会的格差は国の中でも国の間でも拡大している。

これまでも多くのキャリアガイダンスの実践者たちが社会正義に深く関わり、生徒やクライアントのために社会正義を訴えてきた。しかし我々おのおのが社会正義に向けて一定の役割や責任を果たしてきたのだとしても、人々を抑圧し続ける構造的・社会的な障壁については立ち向かっていく必要がある。

キャリアに関する実践家は普通とは違う進路に進む人、非主流の集団に属している人、社会の縁辺に置かれている人、容易にはガイダンスの支援を受けられない人などに手を差し伸べていくことが求められる。

IAEVG は事業者、実践家、学者、政策担当者に対して、自らの実践を導く中心的な価値として社会正義に取り込むべく努力するように要請する。

このように、社会正義のキャリアガイダンスは、あくまで、キャリア支援の専門家が、社会的弱者を支援することを想定している。しかしながら、本稿が描くのは、通常は、キャリア支援を受ける側として想定されている「大学生」の側が、社会正義の担い手となる取り組みである。私の考えでは、社会正義のキャリアガイダンスとは、一方向的に、強者から弱者に向けて実現されるものではなく、むしろ、社会正義を担う仲間として、相互に育ちあう実践である。

このような発想は、先述した、ポランニーの「責任を通じた自由」とも重なり合う。実際、ポランニーは次のような図を描いている。

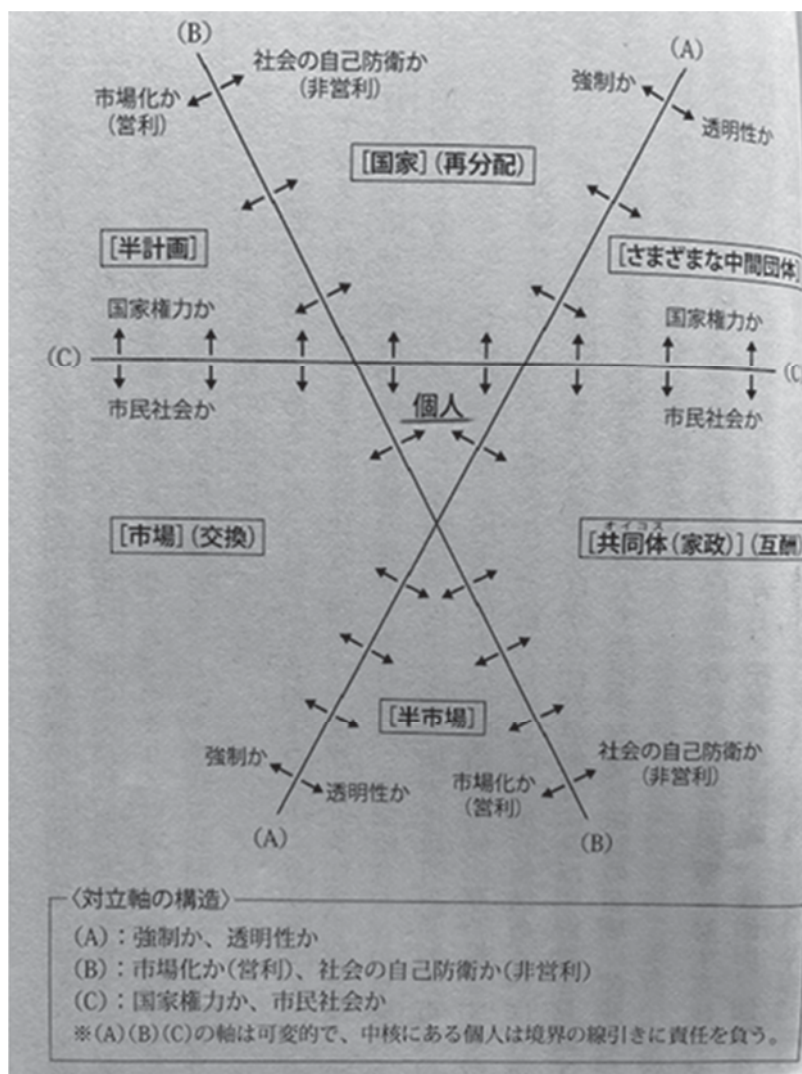


図1 個人はどのように責任を通じた自由を発揮するか（若森、2015：259）

この図においては、(A) (B) (C) の軸は可変的で (=引き直すことができ)、中核にある個人が、境界の線引きに責任を負う。たとえば、どこまで市場を拡大(縮小)するか((B)の線の引き直し)は、個人の責任である。(B)の線を動かすにつれて、国家(再分配)と共同体(家政)(互酬)の領域は縮小(拡大)することになる。

社会正義フレームワーク

では、社会正義を担ったカウンセラーはいったい何をするのか、下村は、その枠組みとして、米国カウンセリング協会（ACA）がまとめた「ACA アドボカシー・コンピテンシー：カウンセラーのための社会正義フレームワーク」（図2）を紹介している（下村、2020: 179）。

表1 ACAの社会正義フレームワーク

	クライアント	組織	公共空間
一緒に行動する	クライアントのエンパワメント	組織間の連携	情報発信
代わりに行動する	クライアントのアドボカシー	システムに対するアドボカシー	社会的・政策的なアドボカシー

いわゆる本人支援は、左上隅の「クライアントのエンパワメント」に当たるが、社会正義フレームワークの特徴は、狭い意味の本人支援に限定せず、本人を取り巻く環境（組織、さらに、公共空間）に働きかけ、同時に、本人の利益の代弁者として行動する（アドボカシー）をも含んでいるということである。すなわち、クライアントのエンパワメントだけでなく、組織間の連携、情報発信、クライアントのアドボカシー、システムに対するアドボカシー、社会的・政策的アドボカシーをも行うことがその特徴である。

センのケイパビリティが「諸個人の能力、財、環境の組み合わせ」であるように、本人の自由を保障しようとするれば、本人のエンパワメントや本人に対する財の提供だけでは不十分で、必然的に環境を変革する活動が含まれてくる。本学における困窮学生支援の取組みもまた、本人に対する支援から始まり、今や、環境への働きかけを含んでいる。

つまり、志賀の貧困理論と関連付ければ、キャリア支援における社会正義フレームワークは、社会的排除の時代における、社会参加の権利保障のためのアプローチといえる。

本学における取組み

社会正義フレームワークが、社会変革の要素を含んでいるように、「新しい貧困」を生む、この社会のありようをこのままにしておいてよいわけではない。つまり、大

学におけるキャリア支援の目的は、単に本人に社会適応してもらうことではなく、この社会を担う責任ある主体を育てること、短く言えば、社会正義の担い手を育てることである。別の言い方をすれば、社会正義は、支援専門家だけが担うものではなく、「皆」で担うものである。

社会的排除の進行

図2は、ペストフの三角形(1992)に、私が注記を加えたものである。ペストフは、この社会を大きな三角形で表現し、この三角形を支える三つのコーナーに、国家、家政、市場という三つの小さな三角形を配した(図2が図1と類似しているのは、ペストフがポランニーの影響を受けたからである)。すなわち、諸個人の経済生活は、国家(再配分)、市場(交換)、家政(互酬)によって支えられているという図である。しかしながら、いずれの小さな三角形によってもカバーされない空隙が真ん中にある。スウェーデンで研究活動を送るペストフは、この領域については、北欧においては、協同組合(Associations)がカバーすると論じている。

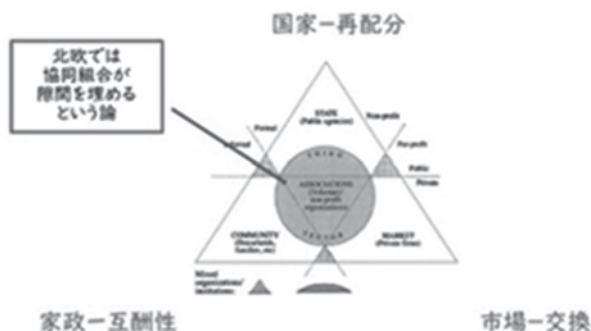


図2 ペストフの三角形

図2は福祉国家を前提としたものであるが、現在は、「新しい貧困」が展開し、する現在、真ん中の空隙が広がりつつある。これがまさに、社会的排除である。すなわち、国家、市場、家族を通じた社会参加が困難になり、改めて、社会参加を権利として保障しなければならない状況を迎えている。このことを表現したのが図3である。図3では、真ん中の空隙が広がり、そこに社会的被排除者が放逐されている。

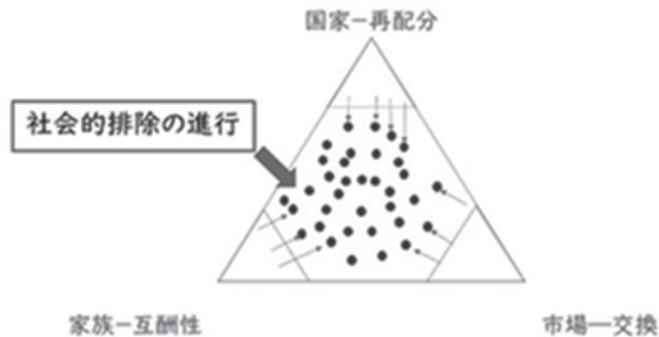


図3 社会的排除の進行

社会的排除の時代における連帯の基盤

私たちは、社会的排除の時代における「脆弱な者」であり、大学生たちはまさにその脆弱性を負いながら、就職活動に追われている。そこで想起されるのは、以下のような宗教者の言葉である。

いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら（親鸞仏教センター（2018））

貧しく小さくされている人たちを通して神がはたらかれることを信じて…その人たちと連帯する（本田（2015））

すべての諸個人が社会的排除のリスクにさらされている現在、「脆弱な者」としての自覚が私たちの連帯の基盤となる。そして、この連帯はいったい何を指すべきなのだろうか。それが、最近、フェミニズムの進展により着目されている概念「ケア」である。

ケアを社会の真ん中に置く

イギリスのフェミニスト研究者が構成するグループ、「ケア・コレクティブ」が『ケア宣言』（2021）という著作を出版した。同書は、

この世界は、ケアを顧みないこと（無関心、無配慮、不注意、ぞんざいさ）が君臨する世界です。（p.1）

という文から始まる。この文は、Our world is one in which carelessness reigns.の翻訳であり、ケアを顧みないこと（無関心、無配慮、不注意、ぞんざいさ）は、carelessness を訳出したものである。carelessness とは、端的に、ケアの欠如である。志賀の貧困理論の文脈におけば、シティズンシップの保障の欠如である。『ケア宣言』では、ケアの欠如している状況について、

たくさんの方の難民の溺死や、身近な通りにホームレスが今までになく増えているといった大惨事について耳にすることは、もはや日常となりました。「ケアしない」という行為のほとんどは無思慮のままに行われます。(p.8)

と述べる。大学においても、困窮した学生が食事を抜いて水を飲んでしようと、さらには、退学しようと、私たちは、それを個人に起きた不幸な出来事として、つまり、careless に、その事態をやり過ごしてしまう。しかしながら、

私たちのほとんどは、必要なケアなしに他者が放置されているのを見て、実際に喜んでいるわけではないし、残酷で破壊的な衝動を持っているわけでもありません。しかしながら、ケアする能力、実践、そして想像力に課せられた制限に対し、私たちが異議を申し立て損ねていることは確かなのです。(p.8)

とあるように、私たちもまた、悪意を持って、careless であるわけではない。そこで、『ケア宣言』は、次のように宣言する。

そうではなくもし生活の中心にケアを置いてみるならば、一体何が起こるのかと今こそ問うべきなのです。(p.8)

『ケア宣言』によれば、ケアとは

・・・政治的、社会的、物質的、そして感情的な条件を提供するという個人的かつ共同的な私たちの能力であり、そうした条件によって、この地球に生きる人々とその他の生物のほぼすべての生命が、この地球とともに生きながらえ、繁栄することが可能になるのです。

すなわち、ケアとは、私たちが生きのびるためのケイパビリティを保障するものであり、本学における困窮学生支援とは、大学の中心にケアを置き、学生が大学生活を生きのびるためのケイパビリティを育む取組みである。

コミュニティ・オーガナイズング

本学における、困窮学生支援に当たっては、ケアを大学の真ん中に置く手法として、コミュニティ・オーガナイズング (Community organizing: CO) を用いる。CO とは、当事者の連帯によって、達成したい課題に関する意思決定者から「YES」を勝ち取るための社会運動の手法である。アメリカで開発された手法だが、ある程度定型化された手法として、世界各地に普及し活用されている (日本語での紹介は、ボルトン (2020)、鎌田 (2020) など)。

CO は、「取るに足らない」私たちであっても、連帯することによって、意思決定者から「YES」を勝ち取るためのパワーを獲得することを可能とする。CO は、女性運動、公民権運動、労働運動、障害者運動などの、当事者運動の知恵を結集した運動手法であり、CO においては、Personal is political (個人的なことは政治的なこと)、Nothing about us without us (私たちのことを私たち抜きで決めな)、This is what democracy looks like. (これが民主主義の姿だ) といった、当事者連帯のスローガンが多用されてきた。

私が学んだ、Midwest Academy¹ の CO は、①戦略と戦術を区別する、②問題と課題 (解決策/イシュー) を区別する、③イシューを確定する、④意思決定者を確定する、⑤力を分析する、⑥力を集める+力を見せる、⑦意思決定者に「yes」と言わせる、というステップで構成されている。重要なのは、これらのステップ全体を設計する「戦略」と、「戦略」を実行するための「戦術」の峻別である。CO は、社会運動を成功させる肝は、戦略を立てることであって、戦術の実施自体ではないことと整理する。戦術とは、力を集め、見せる方法であって、署名、請願、住民投票、メディア戦略、直接行動などが含まれる。CO の根本理念は、一人一人の自己利益を尊重することで、自己利益は自己中心性と利他性の中間にあるものと想定されている。

ところで、CO は、上記、社会正義フレームワークの「社会的・政治的アドボカシー」とほぼ合致する。下村 (2020) は、社会的・政治的アドボカシーのための具体的行動として、「社会的政治的な行動によってうまく解決できる問題を特定する」、「その問題に取り組むための仕組みと手段を検討する」、「協力者とともに議員やその他の政策決定者にロビー活動する」などを挙げているが、これらの行動は、CO とほぼ同様であり、社会正義フレームワークの政治的・社会的アドボカシーが、CO から影響を受けていることが推察される。なお、私は、CO を、全学共通科目「社会を変える手法」で講じている。以下、本学における取り組みについて述べる。

¹ <http://www.midwestacademy.com/>

たべものカフェ

たべものカフェとは、教員を中心とする県立大学緊急支援プロジェクトが発起し、県立大学学生ボランティアセンターが運営する、新型コロナウイルス感染症の流行による経済的または精神的負担に対応するための取組みとして始まった。その活動内容は、①学業やアルバイトで忙しい学生が栄養バランスにとれた食事がとれるよう食料配布をすること、②同じ学生の目線で悩みを聞き、本人の希望に沿って必要な支援に繋げるためのヒアリングを行うこと、③学生が孤立化しないよう、スタッフや利用者同士で、知り合いになってもらったりして、友人作りをしてもらうことの3つである。

たべものカフェは多くの学生に利用されており、草薙キャンパスで行われている「はばたき棟たべものカフェ」は2020年7月から2023年1月の間に、計75回延べ2,323食を提供してきた。また、受け取りに來れない学生のために、2022年11月にふじのくにフードバンクの協力を得て始めた「宅配たべものカフェ」は、2023年1月までに計23回延べ1,033食を提供してきた。

たべものカフェを行って分かってきたのは、学生の困窮の原因がコロナではないことである。たとえば、2022年度（4月から12月）の利用者は利用時点において、その58.6%が月々の収支が赤字であると答えている。親からの仕送りがなく、家賃、学費、生活費すべてを負担している学生、親には一定の収入があるため給付型奨学金を受け取れないにもかかわらず仕送りが無い学生、研究室が忙しくてアルバイトを入れることができない学生（さらには、研究室が終わった午後10時以降にアルバイトを入れ午前2時ごろ帰宅し、それから就職活動をする学生）など、食料を受け取りに來たさまざまな学生から、たべものカフェを運営する学生たちは以下の声を聴くことになった。

「朝は出費節約のため食べていない。就活と研究の両立のため、バイトが出来ていない。費用の不足分は過去3年間で貯めたお金で補う。残りの貯金は2～3ヶ月分あるけど、その先が危うそうだった。」（食品栄養科学部4年）

「一人暮らし。親の支援がない。学費と家賃と光熱費は自費。」（看護学部2年）

「実習半年間の生活費を確保しなければならないのが大変。周りの友達も大変そうらしい。」（看護学部3年）

「ご飯を食べるのは夕方だけ。お昼は水を飲めば何とかなる。」（国際関係学部3年）

「土日はフルタイムでバイト…。家や空きコマは勉強をされていてゆっくりできる時間がなかなかない。」（薬学部3年）

「貸与奨学金8万のうち、5万を家賃にまわす。学費の一部は親が負担している。収入があと1～2万あると服とか靴が買えて有難い。バイトは2月から始めた。おしゃべりだから一人暮らしが続くと病むので頻繁に帰省している。余裕が無くなると1日朝と昼だけの食事。」（国際関係学部2年）

こうした声を聴きながら、学生助けたいんじゃーの学生たちが見いだしたのは次のような負のループである。

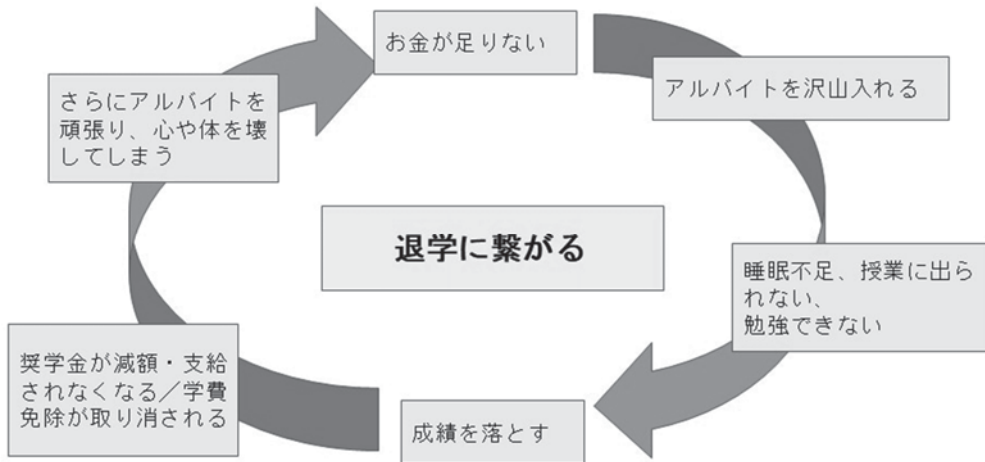


図4 困窮学生の陥る負のループ（学生助けたいんじゃー、2022）

2020年から給付型奨学金が導入されたが、給付型奨学金には、①平均以上の成績を維持する、②留年しないといった条件が設けられているため、心身の調子が悪化したり、成績を落としてしまったときには、学生を追い詰める制度となっている。たべものカフェの利用者には、当初適用されていた授業料減免から外れたり、給付型奨学金が打ち切られたりして、非常な困難に陥っている学生が少なくない。

学生助けたいんじゃー

こうした実情を知り、食料を配っているだけでは解決にならないことから、2021年7月に学生たちと筆者がともに立ち上げたのが、大学の取組みを改善するための提案を行うことを目的とする、学生助けたいんじゃーというチームである。社会正義フレームワークでいえば、アドボカシーのレベルを担うのが、この学生助けたいんじゃーである。このチームは以下のような活動を行っている。

- ① 提案の根拠づくり：より良い提案をするために、たべものカフェを利用する学生からより詳細なヒアリングをしたり、こうした問題を解決する専門職であるキャンパスソーシャルワーカーについて調査を行ったりする。

- ② 大学当局や関係者への発信：学内でたべものカフェや学生助けたいんじャーの活動に関する報告会を開いたり、同窓会との懇談に出席したりする。
- ③ 学生に向けた発信・働きかけ：私の授業で、困窮学生支援の取り組みについて紹介してもらい、受講者に解決策を一緒に考えてもらう。
- ④ 県当局への発信、働きかけ：大学行政を担う部署や、県会議員との協働プロジェクト、総合計画へのパブリックコメントなどを行う。
- ⑤ 公的な外部への発信：Twitter や note などの媒体を使って、発信を行う。

上記の活動を、社会正義フレームワークと対比してみよう。社会正義フレームワークでは、システムに対するアドボカシーとして、次のような行動が列記されている(下村、2020, p188)。

- ・クライアントのキャリア発達を阻害するシステム上の要因を見つけ出す
- ・システムを変革する必要性を示すデータを収集する調査を行う
- ・システムの変革に関するビジョンを各関係者と共有する
- ・システムに影響を与える政治的なパワー、社会的な影響力などを分析する
- ・変化を進めるために「ステップ・バイ・ステップ」の計画を立てる(予想される反対や、変化への抵抗を受け止める方法等を含む)
- ・システムや組織に対してキャリアカウンセラーのアドボカシーが果たせる役割を考える

これらは、学生助けたいんじャーの活動の②にほぼ相当し、①を含む。

さらに、社会的・政治的アドボカシーとして、次のような行動が列記されている(p194)。

- ・社会的／政治的な行動によってうまく解決できる問題を特定する
- ・その問題に取り組むための仕組みと手段を検討する
- ・潜在的な協力者を見つけて、合流する
- ・変革のために既存の協力者を支援する
- ・協力者とともに説得力のあるデータと変革すべき根拠を準備する
- ・協力者とともに議員やその他の政策決定者にロビー活動をする
- ・コミュニティやクライアントとオープンな対話を行い、社会的・政治的アドボカシーを当初の目標と合ったものにする

これらは、学生助けたいんじャーの活動の④にほぼ相当し、①、③を含む。さらに、社会正義フレームワークにおける、情報発信に関する行動は以下のとおりである

(p190)。

- 健全な発達に対する抑圧やその他の障壁の影響を認識する
- 健全な発達を守る環境的な要因を見つけ出す
- 人間の発達における特定の環境要因の役割を説明する印刷物あるいは各種媒体の準備をする
- ターゲットの集団にとって理論的で適切な方法で情報を流布する
- 情報公開を行う他の専門家を探し、連携する
- カウンセラーが行う情報公開の取り組みの影響を評価する

これらは、学生助けたいんじゃーの活動の⑤にほぼ相当し、本稿もまたその一部である。このように、学生助けたいんじゃーの活動は、社会正義フレームワークのキャリアガイダンスに含まれる多くの内容と合致している。こうした類似性は、学生助けたいんじゃーがのメンバーの多くが、私が開講している「社会を変える手法」を受講したことからも生じている。

本稿で改めて強調したいのは、これらの活動を、キャリアカウンセラーではなく、学生自身が行っているということである。学生自身が取り組むことで、社会正義のキャリア支援が、本人たちにどのような学びをもたらしているかを示すため、以下、この活動を通じて、学生たちが何を得ているか、感じているかを紹介しよう。

助けたいんじゃーに参加している学生の声

学生助けたいんじゃーの活動に取り組んでいる学生たち7人に、学生助けたいんじゃーの活動に取り組むことで何を感じたかを、以下の7つの問いを投げかけて自由に書いてもらった。

- 助けたいんじゃーに参加した理由を教えてください。やろうと思った気持ちはどのように培われたのでしょうか。どうしてこのことを放っておけないと思ったのでしょうか。
- 助けたいんじゃーの活動を通じて、何を感じましたか。何を学びましたか。自分に起きた変化について書いてください。
- これまでの活動を通じて、大学（ひいては社会）を変えるには、何をどう考えて、何をどうすることが大切だと思いますか。
- 大学（ひいては社会）を変えていくには、今後、さらに、何をどう考えて、何をどうすることが大切だと思いますか。
- 助けたいんじゃーでの活動は、自分にとってどんな意味があると思いますか。

- ・助けたいんじゃーでの活動を通じて得た、よかったこと、達成感などについて教えてください。
- ・助けたいんじゃーの活動を通じて得た、悔しいと思ったこと、不全感などについて教えてください。

以下は、学生の回答を、どの質問に対する答えであるかとは無関係にまとめ直したところ抽出された6つのテーマに沿って紹介する。

第一は、状況を変えなくてはいけないという使命感・正義感、当事者意識である。

「もしこの活動が『だめだ!』と言われたとしても困っている人を置き去りにすることはできません。」

「活動を通じて感じたのは、常に歩み続けなければならないことです。私たちは困っている学生の代弁者という立場です。私たちが学生の声を発信すること、活動することをやめてしまえば学生の声はどこにも届かず現状は何も変わりません。どんな壁にぶつかろうとも、私たちには待っている人がいるのだから歩みを止めてはいけないのだと思います。」

決してあきらめないという感情は、困窮しつつも生き抜こう、学び抜こうとしている学生たちと出会ったからこそ、出てくる言葉である。学生助けたいんじゃーの学生たちの気持ちの強さに圧倒させられる。

第二は、社会は変えられるという効力感である。

「『あれっ?』と思ったことはそのままにはいけない、動こうとすれば動けるということを学べるという点で意味があると思います。動けると分かったため、『おかしい、どうにかしなくてはいけない、どうにかしたい』という想いはそのままにしておくのはもったいないと感じました。最初は少しずつでも積み重ねていけばできるのだと学びました。」

学生の手で現実を変えるのは実際には困難である。そうであっても、そもそも動くことができること、そして、動けば、「少しずつ」でも現実を変えられるという手ごたえを感じている。

第三は、当事者の置かれている状況への理解と、アドボカシー（発信）の重要性である。

社会正義のためのキャリア支援

「親にも頼れない人がいること、実家暮らしなのに全て自分で頑張らなければならない人、いろんな人に出会いました。この活動をしていなかったら私は知らないで生きていました。」

『「困っている」と発信することは容易ではなく、周囲の環境・サポートが必要だと感じました。そして、その「困っている」は見えづらい・・・すこしでも『見える』ように「困っている」を発信することが大事です。」

学生たちは、当事者の置かれている状況を知るにつれて、その見えづらさを課題化し、代わりに発信（アドボケート）することの重要性を理解していく。

第四に、賛同者を増やすことの大切さである。

「活動が続けるうちに賛同してくれる人、応援してくれる人が増え、行動が拡散される事によって私たちでは届かなかった部分にまで情報を届ける事ができるようになりました。自分が知ってしまった問題を見て見ぬふりをするのではなく、それぞれが少しずつ行動する事によって、波紋が広がりやがてそれが合わさって、大きな動きになると思います。」

学生たちは動くことで、運動のための協力者が集まることを実感し、そして、協力者を集めることが運動の拡大に広がるという好循環を実感している。

第五に、社会問題としての認識である。

「貧困は本人の努力不足のように言われてしまうと、悔しく感じます。そこに存在しているのは本人の問題だけなのでしょう。学びたいと思う人が学び続けられる、そんな環境を大学や社会が作っていく必要があると思います。」

「困っている学生一人一人に向き合える仕組みを、大学や社会の中に拡充させることが大切だと思います。『悩んでいる学生は少数だから見過ごしていい』という考えは、長い目で見れば社会のためにならないと思います。」

活動をしていけば、無理解な言葉をぶつけられることも少なくない。しかしながら、そのような言葉をぶつけられることを通じて、そのような発言の問題点について熟考し、学生の困窮が社会（構造）の問題であることを認識していく。

第六に、「仲間」への言及である。

「(活動してよかったのは) 仲間がたくさん出来たことです! たべものカフェで出会った方(利用して下さった方)、ボランティアとして一緒に活動してくれる方…たくさんの素敵な仲間に出会うことができました。仲間がいるから辛い時に踏ん張れますし、辛さや悔しさも同じ立場で共感することができます。」

「仲間の存在、道標、力になる。あったかい気持ちになるんだよね。ひとりじゃできないけれど、みんなが居れば出来る事がたくさんあった!!」

活動することを通じて形成される「仲間」への信頼が語られる。信頼できる「仲間」を手に入れることができるという原体験が、彼らの未来を支えるであろう。

おわりに

現在、学生たちは自分たちの活動の目的を整理して、次のステップに進もうとしている。図5、図6は、2022年12月に、学生たちが、CSW(キャンパスソーシャルワーク)ネットワークの全国研修会に招かれて発表した、現在の構想である。いずれの図においても、CSWrが構想の中核を占めていることがわかる。CSWrとは、キャンパスソーシャルワーカーのことであり、小中高に配置されている、スクールソーシャルワーカー(SSWr)の大学版を表す言葉である。

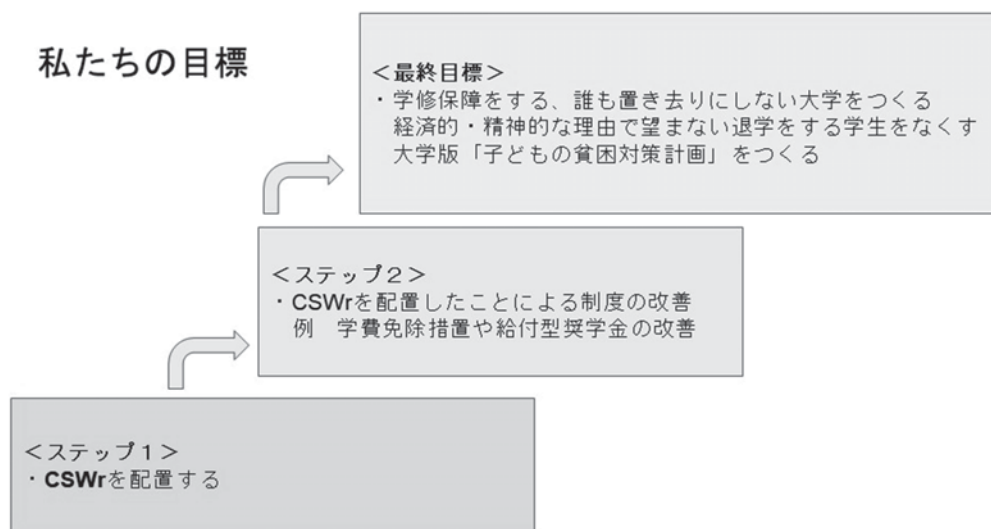


図5 学生助けたいんじやーの目標のステップ(学生助けたいんじやー、2022)

社会正義のためのキャリア支援

図5では、まず、CSWrを配置し、そこで把握された問題を手掛かりに、順次制度改革を行っていくというステップが示される。

学生助けたいんじゃーは、すでに、山形大学、淑徳大学、日本福祉大学などの、CSWrが配置されている大学を訪問調査して、その必要性を確信し、学生助けたいんじゃーは、「県大には心理的な悩み事を相談できるカウンセラーはいるが、金銭的な問題、住居の問題、家庭の問題、アルバイトの問題などを福祉の力を用いて解決に導くための専門家であるCSWrがいない」ため、これらの問題を解決できないと指摘する。たとえば、CSWrがいれば、親との関係が良くない学生に対する、親子関係の調整、親自身に対する親の生活保護申請支援・家計支援、本人の世帯分離の支援や、勉強に困難を抱える学生、単位を落としそうな学生、授業についていけない学生のためのピアサポート（学修サポート）などが可能となるからだ。

さらには、学生助けたいんじゃーは、個別支援の先に、制度改革として、①大学のシステムによる負荷（実習によるアルバイト禁止、研究室による拘束によるアルバイトをすることの困難など）に対する補償、②毎年の貧困実態の調査と公表、③貧困対策計画の立案・実施・評価、④貧困対策に取り組む意思決定機関の設置、⑤学生の問題について、学生と執行部が定期的に協議する会議体の設置（例 自治会）、⑥（学生ボランティアセンターと連携した）居場所の提供などを構想している。

図6は、図5を支援の仕組みという観点からまとめ直したものである。支援の司令塔としての、CSWrの位置づけが見て取れる。これは、学生助けたいんじゃーが視察した各大学の仕組みから示唆を受けたものであろう。

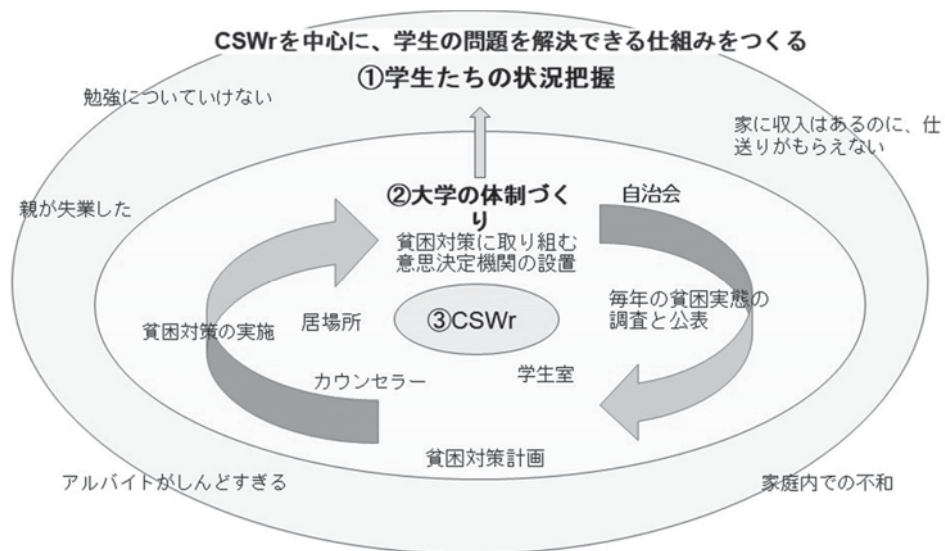


図6 CSWrを中心とした支援の仕組み（学生助けたいんじゃー、2022）

現在、学生助けたいんじゃーの学生たちは、CSWrの導入を求める署名活動を始めている。不慣れな活動のため、その進展はゆっくりしているが、小さな一歩が、徐々に大きな動きになっていくことを期待している。

以上が、困窮学生支援の取組みを通じて、大学生が、社会に対して「責任」を担う主体的な存在として育っていくためのキャリア形成支援の一例である。

参考文献

- ボルトン、マシュー 2020 『社会はこうやって変える！：コミュニティ・オーガナ
イジング入門』 法律文化社
- 学生助けたいんじゃー 2022 「静岡県立大学・学生助けたいんじゃー～学生の現状
と今後の展望～」 CSW 全国研修会報告
- 本田哲郎 2015 『釜ヶ崎と福音——神は貧しく小さくされた者と共に』 岩波書店
- ホネット、アクセル 2021 「資本主義、批判、社会的自由」『資本主義と危機』 岩
波書店 所収
- 鎌田華乃子 2020 『コミュニティ・オーガナイズング——ほしい未来をみんなで創
る5つのステップ』 英知出版
- ケア・コレクティブ 2021 『ケア宣言:相互依存の政治へ』 大月書店
- Pestoff, V. 1992 Third sector and co-operative services - An alternative to privatization.
Journal of Consumer Policy 15(1):21-45.

社会正義のためのキャリア支援

- Polanyi, K. 1927 Über die Freiheit. Karl Polanyi Institute of Political Economy 2-16.
ポランニー、カール 2012 「自由について」 『市場社会と人間の自由—社会哲学
論選』大月書店 所収
- Sen, A. K. 1992 Inequality Reexamined. Oxford University Press. (池本ほか訳
1999 『不平等の再検討—潜在能力と自由』岩波書店)
- 志賀信夫 2016 『貧困理論の再検討』 法律文化社
- 下村英雄 2020 『社会正義のキャリア支援』 図書文化
親鸞仏教センター 2018 『唯信抄文意』 朝日新聞出版
- 高田一夫 2013 「社会政策論の国家論」『社会政策』4(3): 109-119.
- Thomasberger, C. 2003 Freedom and Responsibility: Karl Polanyi on Freedom. Presented
at the Niuth International Karl Polanyi Conference at Concordia University. [https://
www.academia.edu/40550497/Freedom-and-Responsibility-Karl-Polanyi-on-Freedom](https://www.academia.edu/40550497/Freedom-and-Responsibility-Karl-Polanyi-on-Freedom) か
ら2023年2月10日に入手
- 若森みどり 2015 『カール・ポランニーの経済学入門』 平凡社